
僕と幼なじみな新任教師？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幼なじみな新任教師？

【Nコード】

N8230X

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作小説です。文月学園に1人の教師が赴任しました。新任教師『久島蓮夜』は常識から逸脱している生徒達がそろそろ文月学園でどんな生活をするんでしょうか？

第1問（前書き）

毎度、おなじみのまあです。

『思いつき』の昇格です。まだやるのかよ。他もあるのにいい加減にしるよと言つ声も聞こえますが気にしない方向でお願いします。

思いつきで書いた時と設定が変わってきてます事をご了承ください。

第1問

「久島蓮夜ね。高校は進学校、大学時代に海外留学経験あり?……」

久島蓮夜は文月学園の教師に空きが出たと知り、採用試験の内容を電話で問い合わせたのだがその日に学園に来るようになると言われ、現在は文月学園の学園長室で『藤堂カヲル』学園長の前に立たせられている。

(……何か居づらい)

蓮夜は広い学園長室に2人つきりであり、居心地が悪そうにしていると、

「あなた、大学で留学までしておいてどうして教師になろうとなんて思ったんだい? この成績ならあっちで就職先なんていくらでもあっただろ」

「それは、高校時代に恩師とも言える先生に出会えたからです。そんな先生のようにになりたいと思いました」

「……今の時代、そんなの流行らないさね」

「そつかも知れません」

学園長は蓮夜の学歴でこの学園の教師を希望する理由がわからないように首を傾げると蓮夜は少しだけ照れくさそうに笑い、学園長は蓮夜の言葉にため息を吐くが蓮夜の答えが気に入ったようであり、

「採用さね。今日から働いて貰うよ。廊下で待ってな。誰かに案内させるから」

「採用？ 今日から？ へ？」

「何だい？ 何か問題あるのかい？」

「い、いえ、すみません。いきなりすぎて頭が処理できていませんでした。あ、ありがとうございます」

学園長は蓮夜を採用すると笑うと蓮夜は採用試験を受けたその日に同格通知が貰えるとは思っていなかったよつで間の抜けた表情になると学園長は楽しそうに笑い、蓮夜は1度、深呼吸をして自分を落ち着かせると学園長に向かって深々と頭を下げ、

「そつだ。久島先生、あなたには2年Fクラスの副担任と授業全般を受け持つってもらうからね」

「え？ 担当教科は英語でと言う話でしたが」

「あなたの能力ならできるだろ。それにうちのFクラスは特殊だね。西村先生だけだと人手が足りないんだよ。それがあつての採用試験だしね」

「そつですか。わかりました。それでは失礼します」

学園長は蓮夜にかなりの無茶な条件を言い渡すが蓮夜はあまり気にした様子もなく頭を下げると学園長室を出て行き、

「……まさか、こんなに有能な人材が転がってるとはね。良い拾い

ものだったね。能力が履歴書通りだったら、正規も考えてみようかね」

学園長は蓮夜の背中を見送ると蓮夜の第1印象で有能だと判断したようですりと笑うと、

「……高橋先生、あたしだよ。さっき、採用試験を受けたのを採用したから、誰か案内を頼むよ。名前は久島蓮夜だよ。履歴書を見る限りと印象では有能みたいだからね。正規雇用も考えているからしっかりと頼むよ」

「久島蓮夜ですか？」

職員室に内線をかけ、『高橋洋子』教諭に蓮夜の案内を頼むと電話の先の洋子は蓮夜の名前に何かあるのか首を傾げる。

「ん？ 知りあいかい？ ああ、そう言えば同じ大学だったね」

「そうですね。あの、久島くんがですか。わかりました」

学園長は洋子の出身大学が蓮夜と同じだと思いだしたようで学園長からでた言葉に洋子は蓮夜が自分の知っている人間と同一人物だと理解したようであり、

「案内の件、わかりました」

「ん。それじゃあ、頼むよ」

学園長は洋子に蓮夜を任せると内線を切る。

第2問

「……学園祭の準備期間なのに野球か」

「懐かしいですか？ 久島くん」

蓮夜は廊下の窓から野球をしている生徒達を見て苦笑いを浮かべると彼の背後から一見さえない地味な男性が声をかける。

「ふ、福原先生！？ お久しぶりです」

「はい。久しぶりですね。久島くん……いえ、久島先生と呼ばないといけないでしょうか？」

蓮夜は振り返るとその男性は蓮夜が教師を志すきっかけになった恩師である『福原慎』教諭であり、慌てて頭を下げると福原教諭はかつての教え子が成長した姿を見る事が出来た事が嬉しいようで柔らかな笑みを浮かべ、

「えーと、福原先生に先生と呼ばれるとなんか気恥ずかしいですし、それに俺は臨時職員ですし、長居もできるかはわからないですからなれている方が良いでしょう」

「ダメですよ。久島先生、生徒の目もありますから、学生気分では困ります」

「は、はい！？ って、洋子先輩？ きよ、教師になっていたんですか！？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて『くん』付けて良いと答えようとするがそんな彼の考えを否定する女性の声が背後から聞こえ、慌てて振り返るとそこには大学時代の先輩である洋子が立っており、蓮夜の態度では生徒に示しが付かないと言いたげである。

「はい。久島先生の受け持つ2学年の学年主任をやらせていただいています。Fクラスはいろいろ大変だと思いますがお互いに協力して行きましょう」

「学年主任？ 本当ですか？ その若さで」

「文月学園は生徒に限らず実践主義ですから、能力のある人が上のポストにつけるんですよ。久島先生も頑張って臨時職員ではなく、正規職員になれるように頑張ってください。学園長先生も期待しているようでしたよ」

「は、はい。尊敬する福原先生や洋子先輩と同じ学校で教鞭を振るって行けるなら、どんな事でも努力します」

洋子は慌てる蓮夜の様子にくすりと笑うと蓮夜は他の学校ではありえないであろう人事に顔を引きつらせるが福原教諭は蓮夜にも努力をすれば正規の職員にもなれると蓮夜を応援すると蓮夜は大きく頷き、

「久島先生、昔、言っていた尊敬する先生と言うのは福原先生なんですか？」

「はい。福原先生です」

「そうですか」

洋子は蓮夜の様子に以前、彼が話してくれた恩師の事を思い出したように蓮夜が大学時代と変わっていない事に昔を少しだけ懐かしんでいるのか柔らかい笑みを浮かべると、

「久島先生、学園の案内は私と福原先生で受け持ちます」

「よろしくお願いします」

「はい。それとですね。生徒の目もありますから『先輩』は止めるように」

「わ、わかりました。高橋先生」

洋子は蓮夜が昔と変わらない事に安心したようでもくすぐすと笑うと蓮夜は慌てて頭を下げ、

「それでは行きましようか？ 案内が終わったら西村先生にFクラスを紹介していただかないといけないですね」

「はい。よろしくお願ひします……あの、学園長先生も高橋先生もFクラスは大変だって言ってますけど、何かあるんですか？」

「……久島先生、それはおいおい話をしましょう」

「高橋先生、視線を逸らされると不安しか感じないんですけど!？」

福原教諭は蓮夜の案内を済ませようと歩き始めると蓮夜は自分が受け持つ2年Fクラスの話の聞こえとすると洋子は蓮夜から視線を逸らす。

第3問

「それでは、久島先生、行きましようか？」

「はい。西村先生、よろしく願います」

学園設備の案内が終わるとFクラスの担任の『西村宗一』教諭に引き継ぎをされてこれから授業を受け持つ事になるFクラスへと向かう事になる。

「久島先生は臨時職員を続けていたと聞きましたが、どうして正規の職員にならないんですか？」

「なかなか、タイミングが合わなくて後は私以上に有能な先生はたくさんいますから……西村先生、さっきも見てはきたんですけど、旧校舎の方は酷いですね」

蓮夜は西村教諭と少し話をしながらFクラスの教室に向かうのだがFクラスの教室のある旧校舎に足を踏み入れると新校舎との違いに苦笑いを浮かべると、

「まあ、文月学園ウチのカリキュラムでは仕方のない事なんだが」

「実戦主義ですか。それでも、ここまで酷くなると逆にやる気が失せませんか？」

「……久島先生、文月学園ウチの生徒はそんな人間ではないですよ」

「そうなんですか？ それをバネにできる生徒が多いなんて教えが

いがありそうですね」

「……いや、そっちの意味ではないんだ。そうであればどれだけ良
いか」

西村教諭は召喚システムと言う特殊なカリキュラムの影響だと苦笑
いを浮かべると蓮夜はこんな環境下でも勉強に取り組む事ができる
勤勉な生徒がそろっているのだと考えるが西村教諭は眉間にしわを
寄せる。

「そっちの意味ではない？ って事はどう言う事ですか？」

「まあ、見ればわかる。少し待っていてくれないか？」

「はい。わかりました」

蓮夜が首を傾げた時、Fクラスの教室の前に到着したようで西村教
諭は教室の中から聞こえる騒ぎ声に大きいため息を吐き、

「みんな、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補はこの3つです」

教室のドアを開けると生徒達は清涼祭の話し合いをしているようで
少し間の抜けたような男子生徒とポニーテールの女子生徒を中心に
話し合いをしているようで女子生徒は西村教諭に話し合いで出た清
涼祭の出し物の候補の3つを見せる。

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

(あれ? ……ひよつとして、明久か?)

西村教諭は黒板に書かれている3つの候補を見て大きく肩を落とすとFクラスの生徒は西村教諭がため息を吐いた理由を『吉井』と言う男子生徒に責任を押し付け始め、蓮夜はその男子生徒に視線を向けると彼の顔に心当たりがあるようで首を傾げた時、

「馬鹿者!! みつともない言い訳をするな!! 先生はバカな吉井を選んだこと自体がバカな行動だと言っているんだ!!」

「あ、あの。西村先生、それは言い過ぎじゃないでしょうか?」

西村教諭は生徒達が責任を1人の生徒に押し付けた事を叱りつけるがその言葉はどこかおかしく蓮夜は教室に入ると苦笑いを浮かべて西村教諭を止め、

「あ、あれ? レン兄?」

「アキ、この人と知り合い? って言うか、誰?」

男子生徒は蓮夜の顔を見て驚きの表情をすると女子生徒は男子生徒の制服を引っ張り、男子生徒に蓮夜の事を聞く。

第4問

「やっぱり、明久か。大きくなったな」

「ん？ 久島先生は吉井と知り合いですか？」

「レン兄、先生ってどう言う事！？ って、頭を撫でないで！？
僕はもう小学生じゃないんだから！？」

蓮夜は男子生徒の反応に彼が幼なじみの『吉井明久』だと確信したようにぐすりと笑うと彼の頭を撫で、その様子を見て西村教諭は首を傾げる。

「ん？ 悪いな。どうしても昔の印象ってのは変わらなくてな。西村先生、明久は俺の幼なじみなんです。明久の両親は共働きですし、よく家にも遊びに来ていましたので」

「そうなんですか？」

「あのね。印象は変わらないって言っても、レン兄が大学に進学してからなんだから、7年も経つんだよ。僕は高校生なんだから」

蓮夜は苦笑いを浮かべると自分と明久が幼なじみだと話し、明久は変わらない年上の幼なじみの様子に安心しながらも流石に小学生扱いされている事に大きく肩を落とすと、

「あ、あの。西村先生、そちらの久島先生と言うのは？」

「あれ？ 明久、あの子って、お前の小学校時代の友達だよな？」

「う、うん。そうだけど」

1人の女子生徒が西村教諭に蓮夜の事を聞き、蓮夜はその女子生徒に何か心当たりがあったようで明久に女子生徒の事を聞き、明久は頷く。

「そうだよな。名前は確か……瑞希ちゃん、姫路瑞希ちゃんだ。明久の……」

「レン兄、いきなり何を言っただよ!? 姫路さんに失礼だろ」

蓮夜は昔の記憶を引っ張り出すと明久は蓮夜の口を塞ぎ、

「なるほど、そう言う事か?」

「そ、そう言う事って、どう言う事だよ!??」

「まあ、気にするな。兄としては弟がしっかりと成長している姿を嬉しく思っているだけだ」

「……久島先生が吉井と知り合いなのはわかりましたが、一先ずは生徒達に紹介させて貰います」

蓮夜は明久の様子に1つの答えを導き出したようでくすりと笑うと西村教諭は蓮夜を一先ず、生徒達に紹介しようと思ったようで蓮夜と明久の間に割って入ると、

「今日から俺以外にFクラス専属の教師を置く事になった。それがこの先生だ。久島先生」

「はい。久島蓮夜です。今日から皆さんと一緒にこの学園でお世話になる事になりました。今は臨時職員としての採用ですのでいつまで君達を受け持てるかはわかりませんがよろしく願います」

西村教諭は蓮夜を生徒達に紹介し、蓮夜は自己紹介をすると生徒達に向かって深々と頭を下げる。

「久島先生、俺は生徒指導の方もあるので、クラスをお願いします。このバカどもは目を放すと野球をしたり遊び始めますので」

「あ、さっき、野球をしていたのはこのクラスですか」

西村教諭は蓮夜に生徒達を任せると言うと蓮夜は苦笑いを浮かべて頷き、

「ん。そうだった。お前達、クラスの設備の事なんだが、清涼祭の稼ぎを設備向上に使っても良いと学園長先生から話があった。だから、少しは真面目に取り組むように、それでは久島先生、よろしく願います」

「はい。わかりました」

西村教諭は学園長から清涼祭の売上を酷い設備の向上に使っても良いと許可をもらった事を生徒達に伝えると教室はざわざわと騒ぎはじめ、西村教諭は真面目にやる気になった生徒達の様子を見て一瞬だけ表情を緩ませるが直ぐに表情を引き締めると蓮夜に生徒達を任せて教室を出て行く。

第5問

「それじゃあ、俺は見てるから、話し合いの続きを」

「久島先生、まとめてくれるんじゃないんですか？」

「えーとですね」

蓮夜は窓ぎわに置いて教師用のパイプ椅子に腰をかけようとすると明久と一緒に話し合いをまとめていた女子生徒が蓮夜に助けて欲しいのか声をかける。

「島田、島田美波です」

「島田さんだね。すみません。今日、面接を受けていきなりだったから生徒の名前も全然だね」

女子生徒は蓮夜が自分の名前を知らない事に首を傾げた後『島田美波』と名乗ると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「学園祭は生徒のものだからね。教師である俺が口を出すより、みんなで話し合って決めた方が思い出に残ると思ってるね。暴走しすぎると少し方向を正せて貰うけど、今はちょっと早いかな」

「そうなんですか？」

「ああ。それにこの3つの名前は明久が考えただろうから、仕方ないとしても3つとも面白いと思っよ」

蓮夜はまだ教師である自分が口を出す事ではないと笑うが、

「ちょっと、レン兄、僕だから仕方ないってどう言う事!？」

「……なるほど、幼なじみの久島先生がこう言っつて事は明久は昔からバカだったと言うことか？」

「雄二!! どう言う事だ!!」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが1人の大柄の男子生徒のつぶやきに相手を変えたようで男子生徒を怒鳴りつける。

「あ? そのままに決ってるだろ。バカ久」

「上等だ。表出る。バカ雄二!!」

明久と『雄二』と呼ばれた男子生徒はにらみ合いを始め出そうとするが、

「ケンカはしない」

「「あだ!？」」

蓮夜は持っていたメモ帳で2人の頭を軽く叩くと、

「レ、レン兄、何するんだよ」

「明久、お前は島田さんと一緒に意見をまとめないといけないんだろ。後は」

「……『坂本雄二』」

蓮夜は2人の様子にため息を吐くと男子生徒はあまり清涼祭の興味無いのか明久とのにらみ合いを邪魔された事につまらなさそうな表情をして名前を名乗る。

「坂本雄二？ ……えーと、確か、クラス代表だね」

「ああ」

蓮夜は西村教諭から説明を受けているのか雄二がこのクラスの代表である事を確認すると雄二は小さく頷き、

「そう。とりあえずは落ち着く。今はクラスのみんなに迷惑がかかるから止めなさい」

「……止めるのは今だけなのかよ」

「学生時代の友人とはケンカも必要だからな。いじめや行きすぎたものじゃない限り、そこまで強くは言わないよ」

蓮夜は明久と雄二に一先ず、ケンカを止めると雄二は蓮夜がケンカ自体は悪い事と思っていないようで眉間にしわを寄せるが蓮夜は気にする事もなく、

「そ、それは放任過ぎないでしょうか？」

「そうでもないと思うよ。ケンカくらいしないと痛さってわからな
いだろ。それを知らずに人をナイフで刺しましたとかよりは殴り合
いでケンカをした方が清々しい」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜はケンカはした方が良
いと言いつり、

「……おい。明久、久島先生って体育会系か？」

「……うん。高校2年の時にケガで引退するまで勉強なんかしない
で本気でマンガで無敵の流派を倒すって言った。小学校時代から
空手で全国常連」

「……」

雄二は蓮夜の言葉に明久に耳打ちをして蓮夜の過去を聞くと明久か
ら聞かされた事実に関を引きつらせる。

第6問

「それじゃあ、明久、島田さん、続きを頼むよ」

「はい。アキ、あんたも遊んでないで手伝いなさいよ」

「う、うん」

蓮夜は進行を明久と美波に任せると売上でクラス設備をあげる事もできると言う話に盛り上がり始め、

(……暴走しているな)

その暴走は蓮夜が教室に来る前に決まりかけていた3つの出し物以外にもあがって行き、蓮夜はその様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄？」

「静かにしなさい。何のために話し合いをしていたんですか」

蓮夜は立ち上がり生徒達に落ち着くように言うが静まる事はなく、蓮夜は明久と美波を少し遠ざけ、

「……お前ら、人の話を聞く気はないのか？」

教卓を蹴り飛ばすと教卓は粉々に吹き飛んでしまい、その様子に生徒達は何かあったかわからないようで息を飲むと、

「良いか。島田さんと明久は君達を選んだ実行委員なんだよな。そ

れなのにその2人を無視して騒ぐなんてどう言ってもりだ？」

「「「……」」」

蓮夜は落ち着いた様子で生徒達に聞くが蓮夜の背後には何か黒いものが見え隠れしており、その様子に生徒達は驚いているのも重なっているせいか蓮夜の問いに誰も答える事はない。

「坂本代表！！」

「な、なんですか！？」

蓮夜は生徒達の様子に雄二を呼ぶと雄二は自分が呼ばれるとは全く思っていなかったようで声を裏返すと、

「……変わりの教卓を取ってきますので、島田さんと明久と一緒にみなさんの話をまとめておいて下さい」

「お、おう」

蓮夜は苦笑いを浮かべて教室を開けている間の事を雄二に頼み、雄二は代表としての責務も果たしていない事に怒られると思ったように蓮夜の口から出た言葉に慌てて返事をし、

「それじゃあ、島田さんも明久もよろしく」

「は、はい！？」

「……レン兄、やりすぎだよ」

蓮夜は教室を出て行くと明久と美波は顔を引きつらせて蓮夜の背中を見送る。

「く、久島先生は怒らせると怖いのじゃな」

「……………意外」

蓮夜が教室のドアを閉めると同時に教室の中に漂っていたおかしな緊張感は一気に緩み、一見少女とも間違えそうな少年『木下秀吉』と手に持ったデジカメを整備している小柄な少年『土屋康太』の2人が顔を引きつらせながら蓮夜の幼なじみでもある明久に視線を送るとクラスメート達も同じ事を思っているようで視線は明久に集中し、

「な、何？」

「明久、お前が知っている久島先生の情報を話せ」

明久は集まる視線に声を裏返すと雄二は明久の肩に手を置いて明久が知りうる蓮夜の情報を全て話すように言うが、

「な、何を言ってるんだよ。そう言うのはレン兄に直接聞くのが普通だろ。ぼ、僕の口からなんてひ、卑怯じゃないか！！」

「そうか。白状する気はないか？　と言うか、その反応を見ると面白い事が聞けそうだな」

「アキ、何を隠してるの？」

「……………吉井くん、私にもわかるように教えていただけませんか？」

明久は蓮夜の事を話すと自分に都合の悪い事もあるせいか、後ずさりを開始するが瑞希と美波の背後にはなぜか真っ黒な気配が漂い始め、その様子を見て雄二は楽しそうに笑っている。

第7問

「で、何で、久島先生の話をするのをイヤがるんだ？」

「待て！？ 雄二、この状態はおかしいから！？ まずは僕の足の上に乗せられているこの石を避けるんだ！？」

明久は對抗虚しくクラスメートに捕まるとどこから持ち出して来たかわからない石畳の上に正座をさせられるだけではなく、彼の足の上には石が積まれている。

「アキ、別におかしな事を聞いているわけじゃないでしょ。話さないよ」

「美波、おかしいのは話じゃないから、今、僕に起きているこの状況だから！？」

「なら、白状するか？ それなら、石は避けてやる」

美波は明久が蓮夜の事を話す事を嫌がっている意味がわからないとため息を吐くが明久にとっては問題はそこではないと叫び、雄二は蓮夜の情報を話すなら助けてやると笑い、雄二の意見に同調するようにクラスメート達は大きく頷く。

「……イヤだ」

「ムッツリーニ、追加だ」

「……………了解」

明久は意地でも言いたくないのか視線を逸らすと明久の足の上にはもう1枚石が積み上げられ、明久の悲鳴が教室に響くと、

「吉井くん、そんなに久島先生の事を話したくないなんて、2人だけの秘密だなんて、不潔です！！ 酷いです！！」

「ひ、姫路さん、何を言ってるの？ 僕とレン兄でそんな事あるわけが！？」

「……なら、どうして教えてくれないのか、ウチ達に教えてくれないかな？」

瑞希は何かおかしな方向で蓮夜と明久の関係を考えており、明久が全力で否定しようとした時、美波の手により、明久の足の上の石は3枚になっている。

「……明久、幼なじみと言うのはワシらも知っておるのじゃ、簡単なプロフィール喰らいでも良いのではないか？ 年齢とか」

「イヤだよ。そんな事を言っても、みんな、根ほり葉ほり聞く気だろー！！ ……せっかく、レン兄が前みたく笑ってくれてるのに」

秀吉は明久が意地にならない程度の内容で良いと落とし所を提案するが明久はクラスメート達を信用できないようであり、声を張り上げた後、少しだけ悲しそうに目を伏せると、

「……高校2年の時のケガか？」

「な、何を言ってるんだよ。ぼ、僕はそんな事は何も知らないよ」

「……明久、お前、わかりやす過ぎだ」

雄二は少し前に明久から聞いた蓮夜のケガの事をつぶやくと明久はその言葉に慌てはじめ、雄二は大きく肩を落とし、

「それに関しては俺も聞く気はねえよ。流石にお前の様子を見れば深入りしちゃいけない気がするしな。俺はお前を地獄の底に叩き落としたいが、今のところは久島先生には何の恨みもねえしな」

「何だと、それはどう言う事だ!!」

雄二は蓮夜のケガの話には触れないと明久の耳元でつぶやくが明久は雄二の言葉に文句があるようで雄二を怒鳴りつける。

「そのままだ。それより、早くしないと久島先生が帰ってくるぞ。」

久島先生がこれを見ると……この石も拳で割れるか?」

「さ、流石にそれはないと思うのじゃ」

「………あの様子じゃ否定できない」

雄二は先ほどの蓮夜の様子を思い出して、今の行動が自分達の首を絞めている事だと気づいたようで顔の血の気が引いて行き、クラスメート達も雄二と同じ答えに行きついたようで顔を引きつらせると

「誰か、久島先生の足止めに走れ!! このままじゃ、明久の足の上に乗っている石のように割られる!! 全力で証拠を消せ。島田、時間がない。3つから、多数決で決めるぞ」

「わ、わかったわ」

雄二は慌ててクラスメイトに指示を出し、蓮夜が戻ってくる前に証拠を隠滅するために動き出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230x/>

僕と幼なじみな新任教師？

2011年10月28日07時17分発行